

《论语》心得（六）《理想之道》

| | |
|---|--|
| <p>序言：修身、齐家、治国、平天下，这是中国人传统的道德理想，而论语中孔子与他的学生们谈到理想时，孔子并不认为志向越高远就越好，真正重要的是一个人内心的定力与信念。于丹教授认为，无论你的理想是大是小，实现所有理想的基础在于找到内心的真正感受。一个人内心的感受，永远比他外在的业绩更加重要。那么，我们今天该如何理解理想的含义呢？在竞争激烈的现代社会里，孔老夫子的观点与现代社会人对理想的追求是不是有矛盾呢？</p> | <p>「修身齐家治国平天下」という伝統的な道徳観がありますが、孔子は弟子たちが理想について語り合ったとき、遠大な理想をよしとしたわけではありませんでした。それよりも大切なのは揺るぎない信念を持つことだと言っています。理想が大きくても小さくても、それを実現するものになるものは自分自身の気持ちひとつです。何をどう感じるかは、数字に表れた業績より重要です。では理想とは、夢とは、何でしょうか。現代の厳しい競争社会では孔子の言葉と我々の理想の実現の間には矛盾や対立があるのではないのでしょうか。</p> |
| <p>其实翻开《论语》，所有朴素的子句里面全都闪耀着一种隐约的理想。孔夫子说匹夫不可夺志，哪怕是三军可以夺帅¹。这句话在中国的民间流传得很广，也就是说一个人的志向决定了他一生的发展和努力。但是在今天看起来，最重要的不在于我们终极的理想有多么高尚，而在于眼前拥有一个什么样的起点。往往我们不缺乏宏图伟志，但是我们缺乏到达那个志愿之前一步一步积累起来的那条切实的道路。</p> | <p>『論語』に述べられたシンプルな言葉のなかには常に理想への想いが見え隠れしています。孔子の「三軍も帥を奪うべきなり。匹夫も志を奪うべからざるなり」という言葉は中国ではよく知られています。こ人はその志によって生涯の方向性が決定されるということです。現代においても最も重要なのはどれほど高い理想を持つかではなく、今この時にどこを出発点とするかなのです。人はつねに大きな夢や理想を思い描くものですが、その理想に近づくために歩むべき確かな道りを持つ人は多くありません。</p> |
| <p>所以孔子在教学生的时候，在课堂上也经常跟学生聊天，聊天的话题就是说，你们随便说说自己的理想。在论语里面有一个比较长的段落，这在论语中是比较罕</p> | <p>孔子は弟子たちに教えを施すとき、よく気軽な雑談をすることがありました。弟子たちに、自分の夢をなんでも自由に話してみなさいと呼びかけます。たとえば論語には珍しく長い文章に「侍座」とい</p> |

¹ P.267-268

| | |
|---|---|
| <p>见的，完整的段落叫做“侍坐”。就是孔子跟学生坐在一起随意地畅谈理想。那么有一天，他的四个学生，子路、曾皙、冉有、公西华侍坐，坐在老师旁边，然后孔子很随意地跟他们讲，说以吾一日长乎尔，毋吾以也²。你们不要觉得我比你们年长几岁大家就很拘束，今天随便聊聊，平时我老听见你们说居则曰不吾知也，随便待着的时候也没有人了解我。其实这也很象我们今天，在课堂上看到的学生，经常说别人都不了解我有鸿鹄之志，我心中的想法，谁真正能够了解呢。那老师说了，今天你们都随便说一说，如或知尔，则何以哉³，今天假如我想听听你们的志向，你们会说什么呢。听老师这么一说，他的大弟子子路，这是一个性格特别急躁率直的人，所以论语上写的叫：子路率尔而对曰⁴，非常着急地起来就说：</p> | <p>う段落があります。このとき孔子は弟子と一緒に座り、自由に理想について語らせています。ある日、四人の弟子、子路、曾皙、冉有、公西華が孔子の傍らに座りました。孔子は気軽な調子で言います。「吾が一日爾より長ぜるを以て吾を以てすること母かれ」、つまり「私が少し年長だからといって遠慮することはないよ、何でも自由に話してくれ、君たちはよく『居れば則ち曰く吾を知らず』、他人は自分のことを分かってくれないと言っているね」と話しかけました。今の若い人もよく「誰も自分の夢を理解してくれない、自分の気持ちを誰がわかってくれるのだろうか」と言っていますね。この日、孔子は弟子に「如し爾を知る或らば、則ち何を以てせんや」、君たちにどんな理想があるか聞いたら、どんなふうにするか、と問いかけました。最初に口を開いたのは、せっかちな子路でした。論語では「子路率爾として対えて曰く」、つまり子路は慌てて立ち上がってこう答えたと書いてあります。</p> |
| <p>老师我的理想是这样的，给我一个大大的国家，这个国家有着外来侵略的忧患和粮食不足的危机，但只要给我三年的时间我就能把这个国家治理的富强起来，使老百姓不仅丰衣足食，而且人人有信念懂礼仪。</p> | <p>先生、私の理想は、大きな国を治めることです。外敵の侵略と食糧不足という危機にある国を私が治めれば三年でその国を豊かで強い国にし、国民は着る物食べる物に困らず、誰もが礼儀作法を心得ている国家にしてみせます。</p> |
| <p>这几句话一出，我们想一想，对于那么看重礼乐治国的孔子来讲，学生有</p> | <p>これを聞いてどう思いますか。礼楽による国の統治をきわめて重んじた孔子なら</p> |

² p.326

³ p.326

⁴ p.326

| | |
|---|--|
| <p>如此业绩，可以转危为安去拯救这样一个国度会受到什么样的评价呢？谁也没有想到孔子的反映不仅是淡淡的，而且稍稍有点不屑，叫做夫子晒之。冷笑了一下，然后就开始问第二个学生：求尔如何。问冉有这个学生，叫着他的名字，说冉求你怎么样呢。冉有的态度比起子路显然要谦逊很多，没有敢说那么大的国家那么多的事：</p> | <p>弟子が大国を治め危機から救いたいと答えたときどう評価するでしょう。思いがけないことに、孔子は子路の答えに感心するどころかやや冷淡で、「夫子はこれを嗤う」、冷笑したとあります。続いて「求、爾は如何」、冉有が指名されました。求は冉有の名前です。冉有は子路よりずっと謙虚に、そんなに大きな国を治めるなんてことは言えませんかと答えました。</p> |
| <p>我的理想是，给我一个小国，我去治理，我也只用三年，可以让老百姓丰衣足食，但要让人民都有信念懂礼仪恐怕要由比我更高明的君子来做了。</p> | <p>私の理想は小さな国を治めることです。私も三年いただければ民の暮らしを豊かにしますが、礼法を広めるのはもっと優秀な方をお願いしなければなりません。</p> |
| <p>去治理，也给我三年，比及三年，我可以让它做到什么呢？可使足民，也就是做到老百姓衣食富足而已，至于礼仪的事情，冉有说我可不敢做，如其礼乐，以俟君子。想要让大家在整个的民心上变得整齐，对国家有信心，做到礼乐兴邦这样一件事情等着比我更高明的君子来吧，我好像做不到。那么他的话说完了，老师未置可否，接着问第三个人，赤，尔何如。叫着公西华的名字公西赤，你有什么样的理想呢？那么这个徒弟就更谦逊了一层，对曰，非曰能之，愿学焉。先亮出自己的态度，我可不敢说我能干什么事，现在在老师这儿，我只敢说我愿意学习什么事。</p> | <p>国を治めるのに私にも三年間ください、三年で「民をして足らしむべし」、民の暮らしを豊かにしましょう。しかし礼法については自信がない冉有はといます。「其の礼樂の如きは以て君子を俟たん」。国民全体に道德心を植え付け、国家への信頼を築き、礼によって国を興すことは自分より徳の高い君子に任せるしかないと言うのです。孔子はこれに対して何も意見を述べず、さらに公西華に問いかけます。「赤よ、爾は如何」。公西華、お前の理想を話してみなさい。さらに謙虚な答えが返ってきました。「対えて曰く之を能くすると曰うには非ず。願わくは学ばん」。自分に何ができるとは申せません。ただ学びたいだけです。</p> |
| <p>我的理想就是，希望自己在一个礼仪中能够担任一个小小的角色，辅助着主持人做一点我力所能及的事情就行了，至于治理国家管理人民这些事我可不敢说。</p> | <p>私の理想は礼樂の中で補佐的な役割を果たすことです。君主や諸侯を助けて、自分のできる範囲で働ければ満足です。国家を治め、国民を管理するなど、私にはどうてい口にすることができません。</p> |

| | |
|--|---|
| <p>大家会看到，这三个弟子的态度一个比一个要谦逊，一个比一个要平和，每一个理想都更接近自己人生的起点，而不是一个终端的愿望，所以大家会看到这个幅度是逐渐收回来的。那么到此为止，还有一个人没有说话，所以老师又问了：点，尔何如。曾点你还没说呢，你觉得怎么样？这个时候曾点没有说话，论语写得惟妙惟肖，值此一刻大家听到的先是一阵音乐的声音逐渐希落了下来，叫做鼓瑟希。原来刚才曾点一直在专心致志地弹着琴，听到老师说，这个声音逐渐逐渐缓和下来，缓和到最后一声，铿尔，“当”一声把整个曲子收住。象琵琶行所说的“曲中收拨当心画”，有一个完完整整的结束，不慌不忙，舍瑟而作。什么是作呢，过去学生听老师讲课或者大家聊天，在席子上古人都是这样跪坐在自己的脚后跟上，那么老师发问，要表示恭敬，立起在自己的膝盖上，这叫作。所以把琴放在一边，毕恭毕敬直起身来答对老师说话，这样的几个字描写能够看出来什么呢，就是曾点的内心是一个从容不迫的人，他是一个成竹在胸的人，他不会率尔而对，他会娓娓道来，所以他一上来呢还要先说一句，征求一下老师的意见：</p> | <p>おわかりになったと思いますが、三人の答えはより謙虚に、より穏やかなものになり、さらに自分の現在の姿に近づいています。遠大な理想だけを述べることはなく、徐々に身近に手の届くものになっています。あと一人、まだ何も話していない弟子がいました。「点よ、爾は如何」、曾点、お前はまだ答えていないね、どう思うか話してみなさい。ここで論語はうまい描写をしています。それまで鳴っていた楽器の音が止まるのです。「瑟（しつ）を鼓（ひ）くこと希（まれ）なり。」曾点はずっと一心に琴を弾いていたのが孔子の問いを受けて次第に手をゆるめ、最後に「トン」という音を鳴らして演奏を終えました。琵琶行に言うように、完璧な終わり方は、慌てず騒がず瑟（しつ）を舍（お）いて作（た）つのです。作（た）つとはどういうことでしょうか。昔弟子は先生の教えを受けたりお喋りしたりする時は床に正座して坐り、質問に答えるときはひざまずいて尊敬の念を表したそうです。琴を傍に置き、姿勢を正して先生の問いに答える、この描写から分かるように曾点は落ち着いていて、道理をわきまえ、先を争うような人物ではありません。彼は穏やかな口調で、まずは先生にお伺いをたてます。</p> |
| <p>老师，我的想法跟三个同学有点不一样，能说吗？</p> | <p>先生、私の考えは3人とは違いますがよろしいでしょうか。</p> |
| <p>那有什么关系，人各有志，但说无妨。这个时候曾皙才从容地开始了他的描述：曰莫春者，就是到了大概三四月末的时候，就是春深似海的时候；</p> | <p>もちろんだ。志はそれぞれ違ってもそれを話すことは問題ない。そこで曾皙はゆったりと考えを語り始めました。「暮春」つまり三月から四月末の頃、春の終わり</p> |

莫春者，春服既成，穿上新做的春装；冠者五六人，童子六七人，浴乎沂，风乎舞雩，咏而归，他说这就是我的理想。在一个春深似海的季节，穿上整齐干净的新衣裳，带上几位好朋友，再邀请上一批学生弟子，带上一批孩子，大家一起去刚刚开动的沂水中趁着春水把自己洗涤得干干净净，然后到鼓乐台，舞雩台之上，沐着春风，唱着歌谣，让自己有一场心灵的仪式，在一个万物开化、大地复苏春风萌动的季节，把自己融会进去，与天地在一起共同迎来一个蓬勃的时候，当你这样一个仪式完成的时候，我们大家就高高兴兴唱着歌回去了。他说这就是我的理想，我只想这样做一件事。那么他的话说完了，一直没有表态的老师，夫子喟然叹曰：「吾与点也！」。老师长长的感叹了一声，说，我的理想也就是和曾点是一样的。

那么这就是四个人在谈自己理想过程中老师唯一发表的一句话，然后他们就下去了，走了。三子者出，曾皙后。三个同学都走了，曾皙在最后去问他老师：夫三子者之言何如？老师你觉得他们仨说得怎么样呢？老师也很微妙，他挡了一下先不想做评价，子曰：亦各言其志也已矣。无非是每个人说说自己的想法。然后曾点不易不饶还要继续问老师，夫子何哂由也？老师，为什么子路说完后你冷笑了一下呢？问到了这个问题，老师不能不说话了，曰：为国以礼，其言

頃、「暮春は春服既に成り」新調した春の服を着て、「冠者五六人、童子六七人、洴（き）に浴し、舞雩（ぶう）に風（ふう）し、詠（えい）じて帰らん」これが彼の理想だと言うのです。「春の終わり頃、新しく誂えた服を着て、何人かの友人と弟子を誘い、子供もつれてみんなで沂水（きすい）で体を洗った後、鼓楽台や舞雩（ぶう）台で春風に吹かれながら歌を歌うのです。心身ともに生まれ変わるための儀式です。万物が生命を育み大地に春がよみがえる季節に、自分をその中に溶け込ませて天地と一体になって芽吹きを時期を迎えます。この儀式が終わったら、私はみんなと愉快地歌を歌いながら帰ります」。彼はこれが自分の理想だと、ただこうしたいのだと言うのです。それまで態度を表さなかった孔子はこれを聞き感嘆して言いました。「吾（われ）点に与（くみ）せん！」孔子は長いため息をついて言ったのです「私の理想も曾点と同じだ」と。

これは4人が自分の理想を話した中で唯一孔子が発した言葉でした。その後他の3人は座を離れ、曾皙だけが残り、最後に彼は孔子に尋ねました。「3人が言ったことを先生はどう思われましたか？」孔子は微笑んで評論はしたくないと遮りました。「子曰く：亦た各（それぞれ）其の志を言うのみ」みんな自分の思いを述べただけだと。曾点は更に尋ねます。「夫子何ぞ由を哂（わら）えるや」先生、どうして子路を冷笑したのですか。この問いを受けて孔子も説明せざるをえなくなりました。「曰く、国を為（おさ）むる

| | |
|--|--|
| <p>不让，是故哂之。老师说，这个秘密就是一个人你真的想要治理一个国家吗，那么最核心的东西是用礼仪去治理，而不是说用一种强硬的措施，你心中真正有一种温良恭简让，这是论语上所提倡的人生之道。有了这样一种内涵，表现出来的所有措施都是可以变通的，这就是一个人的起点，那么他说你看，子路说话的时候那么草率，抢在大家之前就说出一个宏大理想，其言不让，没有一点辞让之心，所以我就哂笑他，因为他从内心缺乏这样一种恭敬啊。</p> | <p>に礼を以てす。其の言譲らず。この故に之を哂（わら）う」孔子はこう言います。「国を本当に治めたいと思うのなら、礼儀をもって治めることがまず肝要であり、強硬な手段を用いるべきではない。素直で慎み深い心をもつことだと。これが論語の提唱する人生の道です。この心を持っていてこそ、全ての行いが理にかなうものとなります。子路は軽率で吾先に大きな理想を語り、少しも謙遜したところがなかったから私は笑ったのだ。彼の心には恐れ敬う気持ちが欠けていたからね」。</p> |
| <p>【于丹心语】我们不缺乏宏大理想，但缺乏到达的切实道路</p> | <p>私たちには大きな理想が足りないではなくて、確実に理想にたどり着く道のりが欠落しているのです。</p> |
| <p>那么接下来评价另外两个学生，唯求则非邦也与，安见方六七十，如五六十而非邦也与⁵。说冉求说的那个就不是个国家吗，难道说方圆六七十里或者五六十里甚至更小一点那就不叫国吗，也就是说麻雀虽小，五脏俱全，不在于国土的疆域大与小，只要你出言说我去治国，那么请你首先心里面有一面镜子，反躬自省，看一看我的学养，我的为人，我够做这件事吗，但是他的学生少了这个步骤。所以老师说难道他那不是治国吗。接着又说第三个人，愿意学礼仪的这个人，公西华，这件事情他应该说得很谦虚了吧，但老师说唯赤则非邦也与，宗庙会同，非诸侯而合，赤也为之小，孰能为之大⁶。礼仪的事情还</p> | <p>孔子は続けてほかの2人の弟子を次のように評価しました。「ただ求はすなわち邦にあらざるか。いづくんぞ方六、七十、もしくは五、六十にして、邦にあらざる者を見んや」。冉有が言う四方五、六十里の国は国ではないのでしょうか、小さくても国家としての条件を備えていれば領土の大きさに関係なく立派な国家です。国を治めるならまず自分の心に手を当てて、自分に国を治められるだけの力があるかどうかをよく考えるべきでしょう。しかし冉有はそこには思い至らなかったため孔子は「小国は国ではないのか」と注意しました。三人目は学びたいと答えた謙虚な公西華です。孔子は「唯れ赤は則ち邦に非ずや、宗廟会同は諸侯に非ずして何ぞや。赤や之が小たらば、孰か</p> |

⁵ p.327

⁶ p.327

| | |
|--|--|
| <p>算小啊，他做的要是小事，那还有谁做的叫大事，那么礼仪应该是最重要的，不仅是贯穿在每个人生活从始至终的，也是一个国家最重要的事情。</p> | <p>能く大たらん」、宗廟の祭祀を小事というなら何を大事と呼ぶのか、礼楽は最も重要で暮らしの隅々にまで行き渡っている国の最重要事項だと論評します。</p> |
| <p>那么，从孔子对他三个学生隐约的否定和对于曾点的支持中能看出什么呢，其实他给了我们一个，人生脚下的起点。也就是说，让我们手中每一天的生活方式跟你最终治国祭祀的理想终于有了一个勾连的桥梁。</p> | <p>三人の弟子に対する孔子のやや否定的な態度と曾点への支持から私たちは今この場所から歩き始めるべきなのだと悟ります。私たちの日々の暮らし方と国家を治めるという最終目標の間によりやく双方をつなげる橋が見えてくるのです。</p> |
| <p>论语告诉我们，理想无论大小高低，最重要的是你自己内心的感悟。我们每个人都有理想，但我们在繁忙的工作中去追求自己的理想时常常会忽略了我们自己内心的感受，而一个人内心的感受和自己所追求的理想又有什么关系呢？我们每个人就在这样一个匆匆忙忙、周而复始的工作节奏中，还有多少时间，有多少空间能让你真正看见自己心底的愿望呢，往往我们被遮蔽的是心里真正隐秘的心灵的声音。但我们所看到的只是一个社会的角色。</p> | <p>論語が教えるのは、理想の大きさよりも自然な感情の大切さです。人はみな理想を持っています。しかし、日々の忙しさの中で理想を追い求めるとき、心の声をないがしろにしがちです。心の声を聞くことと追い求める理想とにはどういう関係があるのでしょうか。このようにせかせか忙しく働き続ける中で、いったいあとどれぐらい自分の心の奥底に眠る願いに目をやる時間とゆとりが残されているのでしょうか。私たちの心の声は忘れ去られてしまいがちで、目にするのは自分の社会的役割に過ぎないのです。</p> |
| <p>我曾经看到过这样一个小故事，讲到有一个人他自己觉得有抑郁症的前兆，每天很不开心，然后去看心理医生。他跟医生讲，他说我们每天就是害怕下班，我在工作的时候没关系，但是我只要回到家里我就会感到惶恐，我不知道我心里真正的愿望是什么，我无所适从，我不知道我在生活里面该选择什么不该选择什么，然后越到晚上心里面越会恐惧越会压抑，所以夜里头会整夜失眠，长此以往我就很害怕，怕我会有抑郁症，我这样</p> | <p>こんな話を読んだことがあります。ある人が自分はどううつ病ではないかと悩み、心理カウンセラーに相談しに行きました。彼は医者に訴えました。毎日仕事が終わるのが怖いのです、仕事中は平気なのですが、家に帰った途端に落ち着かなくなります。自分が何を望んでいるのか、何がしたいのか、生活の中で何を選び、何を捨てればいいのかもわかりません。夜になればなるほど恐怖心がつり、一睡もできません。このままではきつとうつ病になってしまうのではないかと不安な気</p> |

| | |
|--|---|
| <p>的症状只有经过一夜的煎熬，到了第二天早上上班，进入我的工作状态就好了，他说这怎么办呢。这个医生一直听他倾诉，然后想先给他一个建议，说你看我们这个城市里啊有一个非常著名的喜剧演员，他每天都有表演，他的喜剧演得好极了，所有人去看了以后都会开怀大笑、忘怀得失，他说你是不是先去看看他演出，你看上一段时间回来我们再聊一聊，看一看你这种抑郁前兆的状态是不是有所调整，那个时候我们再来商量方案。医生说完了以后，这个人很久很久没有说话，他抬起头来望着医生的时候，医生看见他已经是满面泪水。很久他对医生说了一句话，他说我就是那个演员。其实这好像是一个寓言，但这样的故事很容易发生在我们今天的生活中。</p> | <p>持ちで一杯です。一晩中苦しんでも、翌朝になって仕事が始まると不安も忘れず。いったいどうすればいいのでしょうか。カウンセラーは、ずっと彼の話に耳を傾けていました。そして彼にこうアドバイスしました。この町に非常に有名なコメディアンがいます。彼は大変すばらしい演技をするので、見る人すべてが心から笑い、悩みを忘れてしまいます。あなたも彼のショーを見に行つて、しばらくしてからまたここに来て、状況が良くなったかどうかを見ましようか。カウンセラーの話聞いて、その人はしばらく何も言わず、やっと彼が顔を上げたときには涙が溢れていました。先生、私そのコメディアンなのです……。</p> <p>これは寓話のような話ですが、実は私たちの日常生活の中でもよく見られることなのです。</p> |
| <p>大家可以想一想，当每一个人已经习惯于自己的角色，在角色中欢欣的表演，认为这就是自己的理想，这是成功的职业，在这个时候还有多少心灵的愿望受到尊重呢，我们在角色之外还留有多大的空间真正认识自己的内心呢。所以这就是为什么会有很多人离开职业角色之后反而觉得仓惶。</p> | <p>考えてみれば、人は自分の演じる役に慣れてしまい、その役割を楽しく演じて、これこそ自分の理想であり天職だと思ひこむようです。自らの心の奥底にある願望と、社会的な役割から離れた自分を許容する余地はどれだけ残されているのでしょうか。職業的役割から離れると落ち着かなくなる人が多いのはこのためです。</p> |
| <p>【于丹心语】成功的职业不一定是你心中的理想</p> | <p>仕事での成功は必ずしも自分が本当に求めている理想ではない。</p> |
| <p>我曾经看到过一个有意思的小故事，说在隆冬来临之前，在深秋的田埂上，有三只小田鼠忙忙碌碌地为过冬做准备。第一只田鼠就拼命地去找粮食，把各种谷穗、稻穗一趟一趟地搬进田鼠洞；第二只田鼠就拼命地去找</p> | <p>以前面白い話を聞いたことがあります。厳冬前の秋の暮れ、田んぼのあぜ道で3匹の野ネズミが忙しく冬籠りの準備をしていました。1匹目は一生懸命に食糧を探して穀物の落ち穂を何度もすみかに運びいれ、2匹目は懸命に冬の寒さを防ぐ</p> |

| | |
|--|--|
| <p>御寒的东西，把很多的稻草棉絮都拖到他的洞里；而第三只田鼠呢就一直在田埂上悠悠荡荡，一会儿抬头看看天，一会儿抬头看看地，一会儿躺一会，弄得它的那两个伙伴一边在忙活，一边在指责它，说你看你这么懒惰，你也不为我们的御寒过冬做准备，那真到了冬天怎么办呢，你看看你这么游手好闲。这只田鼠也不辩解。后来冬天真的来了，三只小田鼠在一个非常狭窄的小耗子洞里面在过冬的时候，发现吃的东西不愁了，御寒的东西也都齐备了，然后每天在这里无所事事，终于大家就百无聊赖了。当大家开始难受得要命的时候，第三只田鼠开始给那两只田鼠讲故事，他说就在那样一个秋天的下午，我在田埂上遇到了一个孩子，他在做什么；又在那样一个秋天的早晨，我在水池边看到一个老人，他在做什么；我曾经听到人们的对话，我曾经听到鸟儿在唱什么样的一种歌谣，所有的这些我当时都记录下来。其实到这个时候，那两个伙伴才知道这只田鼠在为大家储备了过冬的阳光。也就是说，这种表面看起来毫无意义和价值的东西在这个时候会给人心一个淡定的起点。</p> | <p>ための藁や綿を集めています。しかし3匹目は田んぼのあぜ道をのんびりと歩きまわり、ぼんやりと空を眺めたり、あたりの様子を眺めたり、地面にごろごろと寝転がったりしていました。見かねた2匹の仲間には忙しく働く手を休めず文句を言います。「そんなに怠けてどういうつもりだ、冬籠りの準備を急がないと寒くなったら困るじゃないか、遊んでばかりいて！」。三匹目のネズミは何も言い返すことはありませんでした。冬になり、三匹のネズミたちは狭い穴蔵で冬を越し始めました。食べ物の心配はなく、巣の中は暖かです。しかし、何にもやることのない冬ごもりはひどく退屈で、もう死ぬほど退屈で仕方なくなった時、3匹目のネズミが外で見聞きした事を話しはじめました。秋の午後、田んぼのあぜ道で出会った子供の事、秋の朝、池のそばで見かけた老人の事、人は何を話していたか、鳥はどんな歌を歌っていたか、3匹目のネズミは秋の間ずっと冬を越すための物語を集めていたのです。この時始めて、他の2匹は3匹目のネズミが準備していたのは厳しい冬を越すための太陽の光だったのだと気がつきました。一見して何の意味も価値もない事が、時には人々の心のより所となるのです。</p> |
| <p>【于丹心语】表面看来毫无价值的东西，会给人心一个淡定的起点</p> | <p>一見すると何の意味も価値もないものが、人の心のより所となる</p> |
| <p>所有外在的仪式不过是为了一个内心的安顿，那么这种安顿是需要我们去敏锐地感知世界节序变化，感知四时，感知山水，感知风月，这一点可能对我们今天的人来讲是特别的奢</p> | <p>形式的な儀式というものはただ気持ちを落ち着かせるためにあります。このような落ち着いた心は世の中の移ろいを敏感に察知し、四季や山水、風月を感じることで得られるのです。しかし、今の</p> |

侈了，因为今天这种现代化，反季节的事情太多了，到了盛夏的时候屋子里有空调，凉风习习；到了寒冬的时候屋子里有暖气，温暖如春；到了春节的时候有夏天那种大棚里的蔬菜，摆在桌子上五颜六色。也就是说，当生活一切变得如此简约的时候我们还有遗憾吗，这种遗憾就是四季走过，在我们的心上已经变得模糊，我们已经感受不到在这样的一个世界上，由于四季分明带来节序如流在我们心中还能激起什么样的反响，也就是说在自然生活中，在认知内心中，你越淡定越从容，越舍弃那样一些激烈的、宏阔的、张扬的、外在的形式，而尊重安静的、内心的声音，也许你就会有了更多的依据，这一切是为了让你走到社会角色中的时候，可以有担当，能够胜任，能够做到最好。在竞争激烈的现代生活中，我们是否还能关注自己的内心？于丹教授认为，一个人是否能够成就一番事业，并不在于他给自己定了多高的目标，而在于他内心是否能有一种淡定的理念，是否能把握自我。但是淡定的理念就能够让我们实现人生的理想吗？

其实看到《侍坐》这样一篇小短文，在论语中会使很多人感到惊讶，因为他违背了我们传统对于论语那种立志的判读，他不同于曾子所说的**士不可不弘义，任重而道远**这样的话。

私たちにとっては、これは贅沢なことなのかもしれません。現代化が進んだ今日、季節感のない事が多すぎるからです。夏の暑い盛り、室内は冷房で涼しく、寒い冬の日には暖房でまるで春のように暖かい。旧正月には温室栽培の夏野菜がテーブルに並んでいる、などといった具合に生活全般が便利になった今、私たちに欠けてしまったものは季節感です。四季がはっきり分かれ移ろっていく事が自分の心にどのような影響を与えているかを実感できなくなっています。人は自然な生活の中で自分の心を知り、落ち着いた心を取り戻します。刺激的で人目を引く見せかけの姿を捨て去り、心静かに自身の心の声に耳を傾けるようになります。このようにして始めて人は社会において重責を担い、役割を果たし、より良い成果をあげる事ができるのです。競争が激しい現代社会で、自分の心の中に目を向ける事は出来るのでしょうか？ 個人が仕事で成果を収める上で肝心な事は、その人が自分自身にどれだけ高い目標を設定したかではなく、その人の心の中に確固たる理念があり、自分自身を理解しているかどうかであると于丹教授は、考えています。

この「侍坐（じざ）」という短文は、論語において、多くの人に驚きをもって読まれる部分です。それは、志を高く掲げるといふ伝統的な論語の解釈に背いているからであり、曾子（そうし）の「士（し）は以（もつ）て弘毅（こうき）ならざるべからず。任（にん）重（おも）くして道（みち）遠（とお）し。」という言葉とも異なりま

| | |
|--|--|
| <p>但是想一想，它是所有那种人生大道、社会理想内在的一个根本基础，一个人如果没有内心的这种从容和对于自我的把握，在职业角色中我们只能是任职业摆布，而不会有一种内心认同以后对这个职业的提升。在论语中有这么一段意味深长的对话，学生子贡去问老师：</p> | <p>す。しかし、考えてみてください。「侍座」で述べられていることは、人生を歩む上でも、理想の社会を構築する上でも根幹を成すことなのです。人は、心の落ち着きと自分自身への理解を得られなければ、仕事においても与えられた役割をこなすのみで、自分自身を見つめた結果到達できる高みを目指す事が出来ません。論語における味わい深い対話をご紹介しますでしょう。</p> |
| <p>老师，你说什么样的人才叫知识分子呢？是不是读了大学就算知识分子了。 有文凭不等于有文化，一个知识分子一定是知道礼仪廉耻行为有所约束的人。</p> | <p>「先生、どういう人を知識人と言うのですか？ 大学を出たらすぐ知識人になれるのですか」。「卒業証書を持っていれば教養があるとは限らない。本当の知識人は礼義を重んじ恥を知って行動をわきまえるものだ」。</p> |
| <p>我们知道“士”这个阶层是中国的知识分子阶层，这应该是一个很崇高的名誉，是那种无恒产有恒心，天下已任的一个阶层。所以子贡说老师你告诉我，怎么样才叫做一个士呢，老师说：行己有耻，使于四方，不辱君命，可谓士矣（论语子路篇）。他说的最高的标准就是一个人他的行动之间，自己知道什么是礼仪廉耻，也就是行为有所制约，有内心坚决的做人不妥协的标准；而这个人要有用，就是你要为社会做事，孔子讲的并不是说一个人有了内心的修养就可以每天光陶醉在自我世界，一定要出去，不管你拿到的是什么样的使命，做到不辱君命，这可不容易，因为你不知道你所拿到的是一个什么样的令箭，什么样的金牌，让你去做说什么事情都能做到吗？所以孔子说最高的标准就</p> | <p>中国では知識人を「士」という名誉ある称号と呼びます。資産があるわけではありませんが変わらぬ志を持ち天下国家への責務を自認する人々です。子貢の「どういう人を『士』と言うのか」との問いに、孔子はこう答えました「己を行なうに恥あり、四方に使いして君命を辱めざる、これを士というべし」。つまり、「士」とは、礼義を重んじ、恥を知り、行動をわきまえて、断固として妥協しない人のことだ、と言うのです。このような人は世のために働いて役に立たなければなりません。いくら教養があっても自分の世界にこもってはいけないのです。社会に出てどんな使命が与えられても必ず果たす、これは大変難しいことです。なぜならば自分がどんな命令をうけるのか、それが果たせるのかはわからないからです。したがって、孔子は君命を辱めない</p> |

| | |
|--|---|
| <p>是你出去可以做到不辱君命，这就叫做士了。</p> | <p>ことを士の最高基準としました。</p> |
| <p>学生觉得这个标准太高了，就又问他：敢问其次。您给我说再低一级的标准，比这差一等的，曰：宗族称孝焉，乡党称弟焉。就是孝悌之义。在宗族里面大家认为你士一个孝子；而在乡党邻里之间大家以你为兄弟，你能够对所有人都是亲和的，你能够把你那种人伦的光芒放射出来，用一种爱的力量去整合周边，不辱祖先。其实论语就是一个以人伦为基本出发点这样的一个道德文章，所以呢它把次一等定为这样的人。</p> | <p>あまりにも高い基準だったため、弟子は「これより低い基準を教えてください」と頼みました。孔子は「宗族（そうぞく）孝を称し、郷党弟を称す」と答えました。即ち、よく親や目上に仕えるということです。一族の中で孝行者だといわれ、郷里の間で兄弟だと見なされることによって、皆に親しまれる立派な人となり、愛の力で周りをまとめて先祖に恥をかかせないようにするのです。そもそも『論語』は人間の倫理に基づいた道德論です。そこで孔子は、士の二番目の基準をこのように定義したのです。</p> |
| <p>子贡又接着问：敢问其次。第三等，咱们再下一等说还有什么人勉强够着边，能够叫做士呢？结果孔子说出这个话，说了一句我们非常熟悉的话，大家听了以后会瞠目结舌说这么高的标准才是第三等啊。曰：“言必信，行必果，硜硜然小人哉！抑亦可以为次矣。”说那种言必信，行必果，一言既出驷马难追，我一定把这事给你做到，这种他说叫硜硜然小人哉，什么叫硜硜然，就是表现出来剑拔弩张，言语很急切，这样的一种样子，说我不计后果，不计方法，我把事给你做成，他说这种人勉强算第三等，就是能够实现自己的诺言。</p> | <p>子貢はまた「その次の基準、つまり辛うじて士と言える三番目の基準は何か」と尋ねました。すると孔子は、誰もが「こんな高い基準が三番目なのか」と驚くような、有名な言葉を返しました。「言（げん）必ず信、行（こう）必ず果、硜硜然（こうこうぜん）たる小人なるかな。そもそも亦以って次（じ）と為すべし。」一度口にした言葉は取り消さず、必ずやり通す。こういう人を孔子は「硜硜然たる小人」とであると言いました。「硜硜然」とは、こちこちで融通がきかず、せっぱ詰まっている状態です。つまり、結果や方法はよく考えないものの、人との約束は守ろうとする。このような人を、孔子は三番目の基準として挙げたのです。</p> |
| <p>其实大家今天想想说，这第三等也挺高啊，这个标准，言必信行必果今天有几个人能做到啊，他学生也是这么想的，子贡也觉得这仨标准太高了，</p> | <p>でも、この「言必ず信、行必ず果」というのも、とても高い基準だと思いますか。恐らく弟子の子貢もそう考えたのでしょうか。「今の政に従う者はいかん」。</p> |

所以又追问一句说：今之从政者何如？老师你觉得现在从政的人能够上这三等吗？结果老师曰：噫！斗筭之人，何足算也。也就是说，老师把当时诸侯各国的从政者都没有放在眼里，认为他们离这样一个士的标准还太远太远。其实在这里所提出来的详细的不同的标准，这是孔子对一个成熟的在社会职业岗位上有所担承的人他的质量描述。我们来说说这个最高的标准，不辱君命四个字，我们再想一想那个最低的标准，硜硜然不可取的，也就是说要做到不辱君命是在变通中没有条件的把一件事情完成好，这需要调动我们多少人生的积累，这需要一个人有多大的勇气，智慧和仁义之心，其实这样一种不辱君命往往容易让我们想起来战国时候赵国的一个人，就是蔺相如。

大家看《史记·廉蔺列传》经常会看到这样的故事，蔺相如这个人无论是完璧归赵还是沔池会都做到了不辱君命，其实这是不容易的，

当赵王得到价值连城和氏璧的时候，秦王想要夺这块璧，所以就告诉他说，哎呀，我给你十五座城池把这块璧给我们拿过来，我们看一看，赵王当时就知道说虎狼之秦，这块璧一旦进入将没有办法拿回来。

蔺相如说，那这样，我们不去的话是自己理亏，我带着这块璧去如果不能换回城池，我的命和璧拴在一起，有我在就有这块璧在。去了，看到秦王很随便地在他的行宫里面设酒宴宴

今の政治家たちはこの基準に達していますか」と尋ねました。すると孔子は、「ああ、斗筭（としょう）の人、なんぞ算（かぞ）うるにたらん。」この頃の各国の政治家はつまらない人ばかり、とうてい士の基準には及ばないね」と答えたのです。

ここで示された三つの細かい基準は社会において立派に職務を全うしている人に対する孔子の評価です。最高の基準は「君命を損なわないこと」です。一番低い基準は「こちこちで融通が利かないこと」で、これはよくないものとされています。君命を損なわないとは、即ち臨機応変に無条件で職務を全うすること。これは人生経験を活かす必要があるうえ、勇気と知恵、仁義の心も不可欠です。「君命を損なわない」というと、中国の戦国時代・趙国の蔺相如が思い浮かびます。

蔺相如の活躍は《史記・廉頗・蔺相如列伝》に見られます。「完璧」という言葉を生んだ「和氏（かし）の璧（へき）」の話や「沔池（べんち）の会」での出来事は、まさに難しい局面の中で君命を全うしたものです。趙王は非常に貴重な「和氏（かし）の璧（へき）」という玉を持っていました。そこに、秦王がこの璧を奪おうと、十五の城と交換するという条件で、璧を見せてくれと持ちかけます。趙王は秦のよこしまな考えを見通して、秦に持って行けばもう二度と取り戻せないと心配していました。蔺相如は、行かなければ筋が通らないと趙王に言い、自ら璧と生死を共にすると誓って、璧を携えて出かけます。秦に着くと秦王は仮に

请他，然后旁边有大臣，有美人，大家嘻嘻哈哈在这儿很高兴，然后说拿过这块璧来我们看一看，看了以后指给大臣看，指给美人看，大家传着看，蔺相如一看就明白了，说这块玉在这里不受尊敬，就像赵国不受尊敬一样，要拿回来也是很难的事情，所以他就上去跟他说，唉，这个美玉是有瑕疵的，你给我指给你看，秦王就把这块玉还到他手里。蔺相如拿到这块璧以后，退后几步靠在柱子上，怒发上冲冠，持璧而立跟秦王说，他说你在这样一个地方迎接这块玉，你知道我们来之前，焚香顶礼、斋戒十五天，以示对秦国的尊重。我奉玉而来，而你随便把这块玉传于大臣美人，这样的一个傲慢的态度就让我知道，你们是没有真正想要用城池相换的，那么现在好，如果你真要这块玉，你也要这样持戒焚香十五天，而且你先把城池划给我们，我才能够再把这玉给你，如果不然的话，我现在的人头和这块玉同时撞在金殿的大柱上。然后秦王就害怕了，说那好吧，赶紧按照他要的这个礼仪，但即使按照他的这个礼仪，蔺相如觉得他一定不会真正完成他的诺言的，所以蔺相如决定连夜让他自己的家人带着这块美玉逃回了赵国，他自己留在这儿最后做一个交代，最后他跟秦王讲说我知道你没有真正给我们城池之心，这个完璧已经归赵了，已经回去了。其实这是他的不辱君命。沔池会也是一样。

設けた御所で酒宴を設け傍に控える大臣や美女と笑い興じながら早く璧を見せるよう求めます。そして璧を受け取ると、大臣や美女たちに指し示し、さらに手渡して見せたのです。蔺相如は璧が粗末に扱われているのを見て「これでは我が国も尊重されず、璧を取り戻すのも難しい」と考え、こう切り出しました。「この璧には瑕があります。お見せしましょう」。璧を受け取った蔺相如は直ちに後ずさりして柱に背を持たせかけ、逆立った髪が冠を突き上げるような勢いで、璧を持ったまま怒鳴りました。「このような出迎えかたがありますか。われわれは出発する前に香をたき最高の礼を尽くし十五日間も身を清めて秦国への敬意を払いました。しかし、ここでは璧がこんなにも粗末に扱われています。あなたがたが本気で城との交換を考えていないことがよく分かりました。もし璧が欲しいのなら、同じように焼香して十五日間身を清め、先に城を譲りなさい。さもなければ私は今すぐこの頭を璧もろとも宮殿の柱にぶつけてみせましょう。秦王は璧を壊されるのを恐れ、望むとおりにすると言いました。しかし蔺相如は儀式をしたとしても秦王が約束を守ることはないと考え、自分のお供に和氏（かし）の璧を持って趙の国に帰らせ、自分は秦に残ってこの場を収めることにしました。最後に彼は秦王に城を譲る気がないことは分かっていた、和氏の璧はすでに我が国に返したと伝えました。蔺相如はこうして君命を全うしたのです。「沔池（べんち）の会」の時も同様でした。

| | |
|---|---|
| <p>其实这样的故事在中国的仁人志士中，在古典记载的典籍中，不缺少这种例子，也就是说，在一个突变的情形下一个人怎么样能够有所担当，这其实是一个成熟的人在职业角色中所要得到的一种考评。其实这样的故事我们不一一地列举，回头看一看会发现，人怎么样可以变得无畏，可以变得淡定而不仓惶，这是需要每个人在心中找到一个符号的寄托，这个寄托不见得是大家共同认可的一个宏大理想，也不见得是大家都共同认可的说是一种权势，一种金钱，一种情感，可以说每一个人都有自己的达芬奇密码，每一个人的生命链条中一定有他自己最在乎的东西，但凡找到这样一个寄托，会给你这一生找到一个依凭，会找到自己的一个内心根据地。</p> | <p>このようなお話は、中国の偉人や志士たちを描いた古典に数多く見られます。つまり、めまぐるしく状況が変わる中でどのように役目を全うするかは、社会人が職業的役割を果たす上での一つの試練となるのです。このようなお話を一つ一つ紹介しなくても、周りを見ると、どうすれば何も恐れず、落ち着いて対応できるかがわかります。誰もが心の中に何らかの「拠り所」を持っています。しかし、それは誰しもが認めるような大きな理想ではありません。権力やお金でもなく愛情でもありません。それは、誰もの心にひそんでいるダヴィンチコードのような不思議なカギ、命を紡ぐために決しておろそかにできない信条なのです。人は自らの信条を生涯の頼みとし、心の拠り所とすることができるでしょう。</p> |
| <p>于丹教授认为，理想不一定是大家共同认可的一种权势或者金钱，而是一个人一生中最在乎的东西是一种心灵的寄托，但是为什么人们总要追求一个理想，理想之道又能给我们的生活带来什么样的影响呢？</p> | <p>于丹教授は、理想というのは誰しもが認める権力やお金ではなく、人が最も大切にしている心の拠り所であると言います。では、なぜ人は理想を追い求め、理想の道は私たちの生活にどのような影響をもたらすのでしょうか。</p> |
| <p>在论语中说道有多么远的这种理想，其实它一切都在一个朴素的起点上。我们要相信思想的力量是这个世界上最巨大的力量之一，也就是说，孔子经常所说的那种士而怀居不足以为士，一个人总在想着自己的衣食，这是不足以担当一个君子一个士的资格，中国的知识分子所要的并不是一种生活的奢侈，但他们一定要心灵悠游上的奢侈。所以有一次孔子要出</p> | <p>論語の中でどのような高い理想が語られたとしても、その根本は至って素朴なものです。思想の力が偉大なものであると信ずることです。孔子に「士にして居（きよ）を懐（おも）うは、以て士と為すに足らず」という言葉があります。自分の生活のことばかり考える人は君子や「士」にはなれません。中国の知識人が求めるのは贅沢な生活ではなく、ゆったりした心の豊かさなのです。ある日、孔子は「九</p> |

| | |
|---|---|
| <p>远门，子欲居九夷，因为我们知道他要把他的美政理想布化天下，所以要未发达地区。临走的时候，学生就劝他，曰，陋如之何，学生说，那么一个简陋的地方，破地方，你上那儿干吗去。那么孔子怎么回答，孔子淡淡的说，君子居之，何陋之有。</p> | <p>夷」と呼ばれる未開の地へ行こうとしました。自分の理想とする政治を広めるためです。出発をするとき、ある弟子が「どうしてあんな後れた土地へ行くのですか」と尋ねました。すると、孔子は淡々と、「君子が居れば後れていることなどありはしない」と答えたのです。</p> |
| <p>那么这个何陋之有就流传下来，一直到唐代刘禹锡写了《陋室铭》，这是大家都熟悉的，那么《陋室铭》又怎么样形容呢，“山不在高，有仙则名；水不在深，有龙则灵。斯是陋室，惟吾德馨。苔痕上阶绿，草色入帘青。谈笑有鸿儒，往来无白丁。可以调素琴、阅金经。无丝竹之乱耳、无案牍之劳形。南阳诸葛庐，西蜀子云亭。孔子曰：何陋之有？”</p> <p>在这样短短一篇《陋室铭》里面，把古往今来的名士对于简易的朴素居住环境的这种判读全都呈现出来了，大家在一起谈论的是不是共同的志向和共同的寄托，如果大家能够在这样一种丝竹之间，在大家的交流里面可以有了那种心心相通，可以在你共同寄托的大事上有共同的理想，那么这种简陋，它就显得一点都不重要了。</p> | <p>この孔子の言葉は、唐の時代、劉禹錫（りゅううしゃく）の有名な《陋室の銘》の中にも見られます。</p> <p>「山は高きに在らず、仙有らば則ち名あり。水は深きに在らず、竜有らば則ち靈あり。斯（ここ）は是れ陋室にして、惟（た）だ吾が徳のみ馨（かお）れり。苔痕（たいこん）階に上りて緑に、草色簾に入りて青し。談笑鴻儒有り、往来白丁無し。以って素琴を調べ、金経を閲すべし。絲竹の耳を乱るる無く、案牘（あんたく）の形を勞する無し。南陽の諸葛が廬、西蜀の子雲が亭。孔子曰く、何の陋（いや）しきことか之れ有らんと」</p> <p>この短い作品を見れば、昔の偉人が素朴で質素な暮らしをどう捉えていたかわかるでしょう。皆が一緒に語り合ったことは同じ志や信条についてではないでしょうか。静かな音楽が流れる中、心を通わせて付き合い、信条を同じくする仲間と共通の理想を持つことができるとしたら、貧しく質素な住まいなど少しも気にはなりません。</p> |
| <p>所以其实什么是真正的理想，理想之道就是给我们一个起点，给我们储备一点心灵快乐的资源，其实当我们回</p> | <p>本当の理想とは何でしょう。理想の道は、私たちに出発点を示し、より心を豊かにしてくれます。論語の「侍坐（じぎ）</p> |

⁷劉禹錫（りゅう うしゃく、772年 - 842年）『陋室銘』

| | |
|--|---|
| <p>到论语，真正解读了侍坐篇，看到了吾与点也这句喟叹，知道了这样一位万世师表的圣人心中对于那种沐乎沂水，风乎舞于，在暮春时节咏而归，快乐回来的生活方式心存向往的时候，我们就知道，这种阐述跟庄子所说的独与天地共往来是如出一辙的，也就是说所有古圣先贤首先是站在个人的价值坐标系上，了解自己心灵的愿望，然后才会有宏图大志，走到这个世界上有所建树。</p> | <p>編」を読むと、聖人として模範とされる孔子が、自分は曾皙と同じで、「川のほとりで沐浴し、雨乞いの台で涼み、夕暮れに歌いながら家に帰る」楽しい生活にあこがれていると述べています。これは「荘子」の中の「独り天地と共に往来す」という考えと同じです。つまり、昔の聖人たちは、まず自分の価値観に基づいて、心の中の願いを知り、そのうえで大きな志を抱いてこの世で手柄を立てたいと願っているのです。</p> |
| <p>我们都想要一生建立一个大的坐标，对于前方的远景让我们找到一个起点，让我们从自知之明去建立心灵的智慧；让我们从论语里面，也做孔子席前一个安静的学生，跨越这个千古的沧桑，在今天看一看他那种淡定的容颜，想一想他让我们去到自然中的这种鼓励，在我们每一天，真正忙碌的间隙里面哪怕说给自己一点点心灵的仪式，不至于让自己象那样一个人格分裂的演员那样不敢面对自己的内心。其实在今天这么一个后工业文明的社会里，如果能够调整这样一套坐标系统，我想论语会从千古之前传递出来一种温柔的思想的力量，它传递出来一种淡定的清明的理念，它鼓励了我们每个人内心的关照，它让我们有理由相信，我们的理想是有根的。</p> | <p>人はみな人生の計画表を描こうとします。遠くの目標へ到達するための出発点を探しだし、自らを知るこそが人としての知恵なのです。論語を読み、孔子の前に静かに座る弟子となって、はるかな時の流れを超え、孔子の落ち着いた眼差しにふれながら自然と一体になることの意味を考えてみましょう。毎日の忙しさの中で少し立ち止まり、心を見つめ直すのです。あの人格が崩壊してしまったコメディアンのように、自分の心と向き合えなくなっはなりません。今日のポスト工業化社会において、人生の座標軸を持つことができれば、論語は時の隔たりに超えて温かい「思想の力」や冷静ではっきりとした理念を伝え、私たち一人ひとりを励まし、自分の理想が確かなものであると信じさせてくれるでしょう。</p> |

漢文解説

○ 子曰：“三軍可奪帥也，匹夫不可奪志也。”

【注釋】 三軍：周朝12500为一軍。匹夫：普通百姓。

【譯文】 孔子說：“三軍可以剝奪主帥，匹夫不可剝奪志向。”

「三軍は帥を奪うべし。匹夫は志を奪うべからず。」

読み方「さんぐんは すいを うばうべし。ひつぶは こころざしを うばうべからず。」

(意味) 三軍(一軍は1万2千5百人)の中心は大將だが、これは衆人の上に立つものだから奪うことができる。しかし一人の人間の中心である志はその人間の中にあるので、奪うことはできない。

→ 人間の意志を決めることができるのは、その人間だけである。どんな人生を歩むかは、その人の自由だ。今の自分は、すべて今までの自分の決断の結果である。

○ 行己有耻, 使于四方, 不辱君命, 可谓士矣。

【原文】 子貢問曰：“何如斯可謂之士矣？”子曰：“行己有耻，使于四方，不辱君命，可謂士矣。”曰：“敢問其次？”曰：“宗族稱孝焉，鄉党稱悌焉。”曰：“敢問其次？”曰：“言必信，行必果，硜硜然小人哉！抑亦可以為次矣。”曰：“今之從政者何如？”子曰：“噫，斗筲之人，何足算也？”

【注釋】 硜硜(坑): 击石声。筲(哨): 饭篮。言必信，行必果：说到做到，行动坚决。

【譯文】 子貢問：“怎样才能算个真正的士呢？”孔子說：“做事時，要有羞耻之心；出国訪問時，不辱使命。可算士了。“請問次一等的呢？”“同宗族的人稱贊他孝順，同鄉的人稱贊他尊敬師長。“請問再次一等的呢？”“說到做到，不問是非地固執己見，当然是小人！但也可以算最次的士了。“现在的领导怎样？”“噫，这些鼠目寸光的人，算什么呢？”

「子貢問うて曰く、『何如なる斯れ之を士と謂うべき。』子曰く、『己を行うて恥あり、四方に使いして君命を辱めざる、士と謂うべし。』」

読み方「しこう どうて いわく、『いかなる これ これを しと いうべき。』し いわく、『おのれをおこのうて はじあり、しほうにつかい して くんめいをは ずかしめざる、しと いうべし。』」

(意味) 子貢が質問していうには、「どのような人物を士といたしましょうか。」と。孔子が答えて、「自分の行いに廉恥心があって、本国を出て四方の諸侯に使いに行った時には、一言一行に気をつけて君から命ぜられた任務を辱めなければ、士と称しても恥ずかしくない」といった。

「(子貢) 曰く、『敢えて其の次を問う。』曰く、『宗族孝と称し、郷党弟と称す。』」

曰く、『敢えて其の次を問う。』曰く、『言必ず信、行い必ず果、コウコウ然として小人なるかな。抑亦以て次と為すべし。』曰く、『今の政に従う者は何如。』子曰く、『噫、斗ソウの人、何ぞ算うるに足らんや。』

読み方「いわく、『あえて その つぎを とう。』いわく、『そうぞく こうと しょうし、きょうとう ていと しょうす。』いわく、『あえて その つぎを とう。』いわく、『げん かならず しん、おこない かならず か、こうこうぜんとして しょうじん なるかな。そもそも また もって つぎと なすべし。』いわく、『いまの まつりごとに したがう ものは いかん。』し いわく、『ああ、とそうの ひと、なんぞ かぞうるに たらんや。』

(意味) (先の質問に引き続いて子貢が) 質問していうには、「これに次いで士と称することのできるのはどんな人ですか」。孔子がいうには、「親族の者が孝だとほめ、その他の郷里の人が弟だとほめるような人は、士の次である。」と。「これに次いで士と称することのできるのはどんな人ですか」。孔子がいうには、「言うことを守って信実であろうとし、行えば必ず最後までやろうとするのは、小石のように固い小人ではあるが、その次のランクの士と言えよう。」と。「では、今の政治に携わっている人たちはどうですか」。孔子は「ああ、あの人たちは斗ソウ(ますや竹の器)のように狭量な人たちだ。どうして士の中にかぞえられようか。」といった。

○ 曾子曰：士不可以不弘毅，任重而道远，仁以为己任，不亦重乎。死而后已，不亦远乎。

曾子以为，作士人，不可以不弘毅。因为士人的责任重大，而且所行之道遥远。如何重大？以行仁为自己应负的责任。如何遥远？这种大责任要一直负下去，到死为止。

「曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己が任となす。亦重からずや。死して後已む。亦遠からずや。」

読み方「そうし いわく、しは もって こうきならざる べからず。にん おもく して みち とおし。じん もって おのが にん と なす。また おもからずや。しして のち やむ。また とおからずや。」

(意味) 曾子が言うには、学に志す者は心が広くて力が強くなければならぬ。任務は重く、道は遠い。仁を自らの任務としているのであるから、重いではないか。死ぬまで担がねばならぬ。道が遠いではないか、と。

○劉禹錫(りゅう うしゃく、772年 - 842年)『陋室銘』

山ハ高キニ在ラズ、仙有レバ則チ名アリ。水ハ深キニ在ラズ、龍有レバ則チ靈ナリ。斯レ是ノ陋室、惟吾ガ徳馨レリ。苔痕階ニ上ッテ緑ニ、草色簾ニ入リテ青シ。

談笑鴻儒有り、往來白丁無シ。以ッテ素琴ヲ調べ金經ヲ閱ス可シ。絲竹ノ耳ヲ亂ル無ク、案牘ノ形ヲ勞スル無シ。南陽ノ諸葛ガ廬。西蜀ノ子雲ガ亭。孔子曰ク、君子之ニ居ル何ノ陋カ之有ラント。（山は高ければよいというのではなく、仙人が住んではじめて名山となる。湖沼は深ければよいというのではなく、龍が住んではじめて壺なる場所となる。この私の住む家は狭く小さいが、私の徳は香り高い。だからなにも恥じることはないのだ。苔むした階段を上れば緑が美しく、草木は簾越しに青々と眺められる。談笑しているのは、ここに集う大学者たちであるし、無位無官の者たちの往来は無い。ここでは琴を弾いたり、貴い書物を読んだりしている。俗曲を奏で耳を汚すことも、文書や手紙を書く労も無い。南陽の諸葛孔明の草廬や、成都の揚雄の載酒亭などの庵室にも比べられようか。孔子も「君子ここに居る、何の陋かこれあらん」と言っているのである）